2009年大学教育学会課題研究集会レポート（４）

報告者：岩野　恵子（大学教育推進担当課長）

2009.11.29　於：大阪市立大学　学術情報総合センター10階会議室
シンポジウムⅢ　テーマ　「大学人」能力開発－学生を視野に入れて考える
発表者：佐々木　一也（立教大学）　　これまでのまとめと展望
　　本郷　優紀子（桜美林大学）　学生を視野に入れた職員企画の教職協働
　　秦　　敬治　（愛媛大学）　　学生目線からのFDとSD

シンポジウムの概要

これまでに実施されてきた、本テーマに関わる議論のなかで、次の４点の課題が明確になっている。

（１）　教職員それぞれの専門性のあり方の問題
（２）　教職員両者間あるいは内部でのコミュニケーションの問題
（３）　「大学人」による改革を考える上で、改めて学生を視野に入れること
（４）　「大学人」による改革に不可欠な制度的、組織的裏づけをどのように実現するか

これらの４点の課題について、これまでの議論を振り返りながら確認するとともに、解決に当たっての道筋を示す。

佐々木氏発言概要

2007年からの本学会におけるラウンドテーブルや課題研究会において、教職協働における現状と課題、教員が求める職員像について議論が行われてきた。各セッションについて問題点、課題などが話し合われてきたが、そこに共通する課題は、“大学という組織の特性の理解”“教職員の相互理解の浸透”“協働の組織的裏づけの用意”“職員の専門性を高める”などであり、その動機となっているのは『学生を中心する大学運営』つまり学生こそが教職協働の動機となり、その成果がインセンティブになるとの提言がなされた。

本郷氏発言概要

桜美林大学では、「学生の学士力醸成のための取組」を教職協働として実施。中教審から出されている「学士課程教育の構築に向けて」のなかで言われている“単位制度の実質化”“授業改善”という点から、職員企画によるe-ラーニングシステムの開発を行った。

本企画は、職員による企画については学内の賛同・協力を得るための正規ルートがないことから、直接学長に企画を提出し、学長からのトップダウンで実現した。現在は、職員と教員からなるWGで進めており、まさに教職協働の形で取組を進めている。この場は、学生の学習支援を目指すという共通の目的のもと、教職員それぞれの立場で獲得している知識・情報を共有しようという意識が芽生え、相互理解が自然と行われている。

秦氏発言概要

四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）フォーラム等において、大学改革プロジェクトに関する調査・企画・発表の中で、学生による FD・SD に関する提案がなされた。（⇒学生たちは FD・SD についても自主的に着目）

企画等は学生に任せた結果、学生から FD・SD の業務についてインターンとして受け入れて欲しいとの希望があり、それを実現している。

また、学生の声を大学のベクトルや AP、CP、DP と授業評価のベクトル評価に活かすという観点から『授業コンサルタント』『カリキュラム・アセスメント』ということが行われている。いずれも、第三者が入り、学生から当該授業についての意見をきくものであり、それを担当の学科、教員へフィードバックしている。授業評価アンケートに比べ、詳細で膨大、かつ公平なデータを収集することが可能であり、教員の行動改善に結びつきやすい。

FD・SD に学生が評価－参加－提案を行うことで教育の質の改善、人材開発が可能となる上昇スパイラルが必要ではないだろうか。

松山大学　学生発言概要

FD・SD の研修生を経験。動機は、なぜ学生に対してアンケート結果（授業評価アンケート）を見せてくれないのかという疑問から。実際に研修を行い、FD・SD が何を行っているのかが見え、安心感を得られたと同時に、自大学をよくしていきたいと思うようになった。学生も大学の構成員として何でも言い合える環境づくりが必要だと感じる。

後半は、これらの発言を踏まえ、以下の項目により意見交換が行われた。

『授業改善に職員がどの程度関わればよいか』

- 桜美林大学では、授業運営に職員が関わっている。
- 職員が教員と対等に FD を実施していくなら、その専門を勉強する必要がある。思いつきで語っても教員は聞いてくれない。

『学生はどこまで学校経営に参加できるか』

- 学生の参加をどの程度まで考えたらいいのか
- 大学の構成員の一人であることを位置づけて大人として迎え入れることが必要
- 今後、社会人学生が増えてくると、学生の役割、位置づけも変化してくるのではないか

『職員育成をどう行うか』

- 以前は、学生課など学生との接点のある部署に職員を重点的に配置していたが、現在では経営ラインに重点的な配置が行われている。窓口は、学生へ単に対応をするだけではなく、定点観測的な意味をもち、そこで学生の変化に気付くということが重要になる。
- 職員を育てる教育力が低下している結果、職員どうしの統合力が低下してきている。
- 職員育成を単独の大学で行うには限界がある。他大学との交流や研修の機会を提供していくため、いくつかの大学で取り組んだほうが効果的に実施できる。実際に SPOD では、四国地区の大学で SD プログラムをつくり今後、実施していく予定。